

メスに恋した

オスカマキリのはなし



きいておくれよ、このはなし。

オスカマキリの頭の中は 草のかげから ちらりと見えた メスカマキリで いっぱいだった。
メスのするどい その鎌に カマキリの目は 釘づけだった。 胸は高鳴り 心臓ドキドキ。

家に帰ると 弟カマキリ、 バッタのシチューを 煮こんでた。 鍋からのぞく 足二本。
おいしいにおい プンプンただよう。

けれどどうした カマキリは？ カマキリの心 うわのそら。 目もうわのそら 黄目をむく。
キリギリジュース 出されても まったく興味を しめさない。

弟カマキリ 心配で、 兄カマキリに 声かける。 するとどうした この兄ときたら とんでもないこと 言い出した！
「弟よ 俺は決めたぜ 草原の あの嬢さんと 結婚するぞ！」

弟ビックリ ピョンと跳ね、 そのままバツタリ 気絶しちゃった！
兄も仰天 驚いて、 水くんできて 顔にバシャ！

弟気づくと 起き上がり ブンブンワーワー 泣き出した。
「卵から 生まれてこのかた この日まで 一緒にいたのに 僕を置いてくの！？
お願いだ 僕を一人に しないでよ これから誰が えさをとるのさ！？」

それ聞いた兄 笑い出す。

「弟よ 心配しなくて いいんだよ お前も一緒に 住めばいいのさ
式を挙げ 新居をかまえ 落ちつけば お前を迎えに 来てやるからな」

それでも弟 泣きじゃくる。「そうじゃない 兄さん分かって ないんだよ！」

後はさっぱり 何言ってるか 分からない。 それでカマキリ 弟置いて さっさと出かけて 行っちゃったのさ！

風はそよそよ 草はざわざわ。

カマキリ自慢の 四本足で カサコソカサコソ 草むらを行く。

途中にちっちゃな 池があり、そこに住むのは クロメダカ。

メダカは水から カマキリ見つけ とんがった口で ごあいさつ。

「こんにちは、カマキリ君。」「こんにちは、めだか君。」

「何しに行くの？」と メダカは聞いた。 それでカマキリ せきばらい一つ、 大きな声で
こう言った。

「聞いてくれ 俺は決めたさ 結婚を 申し込むんだ カマキリちゃんに！

この鎌は 地上の三日月 この羽で 飛んでいこうよ あの子とハネムーン」

それを聞いたら クロメダカ、 とつぜん泣きだす 水の中。 あんまり泣いた ものだから
ちょっぴりあふれた 池の水。

「ろくでなし！ どうしてそんな ことなの！？ 友だちだって 思ってたのに！」

後はさっぱり 何言ってるか 分からない。 カマキリやさしく こう言った。

「心配は 無用さ泣くなよ めだか君 結婚したって 君は友だち

あの子なら きっとボウフラ 料理でも 出来るさいつでも 遊びにおいで」

それでカマキリ、泣いてるめだかを 後にして とっとと歩いて 行っちゃったのさ！

カマキリは ひたすらは進む 勇ましく。

草をかき分け 根っこをふみ越え。

道を渡って 会ったのは、 毛づくろいする カヤネズミ。

ネズミはハタと 手を止めて じろじろ見回す カマキリのこと。 そしてクスクス 笑うんだ

。

「あらまあまあ うわさに聞いた カマキリね！ほんとにみっとも ない姿ねえ！

目はギンギン 足はヒョロヒョロ カマキリさん いったいどこへ 行こうというの？」

カマキリ怒って いかくのかまえ はねをひろげて 言い放つ。

「ひげ面め！ 聞けこの俺は 結婚を 申し込むんだ カマキリさんに！

ひをあびて おれの体は 武者ぶるい あの娘に見せて やりたい勇姿さ」

これを聞いたら カヤネズミ、笑いが消えて わなわなと 震えておそれて こう言った。

「親泣かせ！ この恥知らず とんちんかん！ もう知らないわ 勝手になさい！」

そしてネズミは チューと鳴き、 やぶの中へと 逃げてっちゃった。

それでカマキリ 勝ち誇り、 鎌を振りあげ 勝どき上げて、とっとと歩いて 行っちゃったのさ！

目指す草むら まではもうすぐ。

細いからだも なお引き締まる。

その少し前で 会ったのは、 古い知り合い ガマガエル。

「こんにちは。カマキリよ。」 「こんにちは。カエルの翁。」

「どこへ行くね？」と カエルは聞いた。 もはやカマキリ 怖いものなし、 とくい顔して
こう言った。

「見ておくれ 今日一段と この俺は 男前だろ 輝いてるだろ

そのはずさ 俺は結婚 するんだよ 草むらで見た かわいいレディーと」

それを聞いたら ガマガエル、 すましたかおに 涙がぽろり。 しわだらけの顔 つたって落
ちる。 そしてゲコゲコ なき出した。

するとどうだろ、 あっちのカエル こっちのカエル、 翁に合わせて ゲコゲコゲコ。

なんだか知らぬが カマキリは言う。

「ありがとう 君らも幸せ つかめよな カエルの式歌 祝ウエディング」

それでカマキリ、 泣いてるカエルを 後にして さっさと歩いて 行っちゃったのさ！

カマキリ草むら ご到着。

いよいよまみえん あのかわいい子。 すらり細い足 しているあの娘。 惚れ惚れする鎌 持
ってるあの娘。

彼女の心を 掴むには いったいなんて プロポーズしょ？

あれこれいろいろ 考えてみても
あとにはけっして もう引けない
愛を伝えて しつこくせまって
あたって砕ける 色男
あしたはあしたの 風が吹く

ススキのかげに 隠れてた
エノコログサの その近く
オオバコよりは ちと遠い
そこにいたのは カマキリちゃん。 恋して焦がれた カマキリのレディー。

黄色いおめめが 飛び出しそう
か細い足が 折れちゃいそう
落ちつけカマキリ 正念場
お前になれば ぜったいできる

いまだ飛び出せ あの子の前へ！

さっそうと 躍り出ました メスの前。

飛び出したのは いいけれど、 オスはここぞと いうときなのに、 緊張しちゃって 舌絡まって さっき作った あの言葉、 女殺しの 名文句、 あたま真っ白 すっかり忘れた！

そこでカマキリ やけくそで、 ただ大声で こう言った。

「カマキリさん！ ぼくとけっこん してください！」

メスのカマキリ 驚いて、 目を点にして オスを見る。
だけど即座に こう言った。

「よくてよ。 きれいなカマキリさん。」

気分は絶頂、 最高潮。 生きててよかった この日まで。 きょうという日に ばんばんざい。 明るい未来に 大かんぱい。 案ずるよりは 産むが安しと 昔の人は よく言った。 なるほどそうだよ そのとおり。 大切なのは この気持ち。 ぶつかってみる この勇気。 なせばなるなる 何ごとも。 信じるものは すくわれる。

オスは幸せ 彼女のためなら たとえ火の中 水の中。

オスカマキリは、 天にもものぼる 心地だったさ、 そのときは。

ところがどっこい、 メスカマキリは にっこり笑って オスに向かって 鎌をふりあげ 襲ってくる！

だってこの きれいなオスは ほんとにほんとに

おいしそう！

メスはニタニタ よだれタラタラ おめめギラギラ 鎌をヒラヒラ
オスはおたおた 足をじたばた 羽をばさばさ いのちからがら

これでおしまい このはなし。 つきあってくれて ありがとう。

メスに恋したオスカマキリのはなし

<http://p.booklog.jp/book/46816>

著者：しんゆ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shinyu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46816>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46816>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.